令和8年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【岩槻中学校】

①	今年度の目標と学力向上策
重点的に育成する資質・能力	【自ら問いを見いだし、他者と協働して粘り強く解決・表現する力の育成】 ①事象から「問い」を立て、自ら見通しを持つ力（課題発見力） ②情報を結びつけ、協働して「粘り強く」最適解を探求する力（思考・判断力） ③根拠に基づき「論理的に表現」し、学びを振り返る力（表現力・メタ認知力） 学校課題研究のテーマにもある「教科等横断的な学習指導」の要として、この3つの柱を位置づけていく。
⇓	
実施する学力向上策【時期・頻度】	①「学びの視覚化」と振り返りの実践 ・①「主体的な学び」の視点・②「対話的な学び」の視点 ・③「深い学び」の3つの視点についてピクトグラム等を用いて、本時の「学びの見通し」を示し、終末に「振り返り」の時間を確保する。 【毎時間の授業】授業内・終末5分 ②「魅力ある課題」の設定と協働解決 各教科の単元計画において、地域の事象等と関連付けた「自分事となる課題」を設定し、対話的な学びを位置づける。 【単元ごとの計画】単元内に1回以上

⑤	年度末評価	
学力向上策の実施状況	評価（※）	
⇓		
今年度の成果と次年度の課題		

※評価　A 8割以上（達成） B 6割以上（おおむね達成） C 6割未満（あと一歩）

②	全国学力・学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	数学科は「数と式」や数学的表現を用いた説明問題の領域で全国の平均正答率を下回ったが正答率は8割を超えた。また、「思考・判断・表現」と関連する、「数学的に表現したことを事象に即して解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができるかどうかをみる」問題においては無回答率が多かった。国語科は平均正答率自体は良好だが、「書くこと」の問題で無回答率が高く、記述に取り組む生徒と手をつけない生徒に分かれている。「読むこと」においては、全国の平均正答率とほとんど変わらない結果である。両教科とも基礎知識を活用できる生徒が約5割いる反面、難色を示す領域や記述課題において最初から思考を放棄してしまう解答反応率の偏りが特徴である。
⇓	
結果から考えられる児童生徒の実態	調査結果からは、基礎力を備えた生徒が半数存在する一方で、自らの考えを表現する力や、難度の高い課題に向き合う姿勢において個人差が見られる。数学科での解法プロセスの説明や、国語科での「書くこと」など、頭の中の考えを文章や数式に整理して伝えることにハードルを感じる傾向がある。記述問題への取り組みにおいて、最後まで粘り強く向かう生徒がいる一方で、難しさを感じて書き出しに戸惑ってしまう生徒も少なくない。一人ひとりが自信を持って記述に取り組めるよう、丁寧な学習支援を行う必要がある。また、基礎力はあるものの、「正解を書かなければならない」という意識や自信のなさから、思考プロセスを書き残す前に諦めてしまうところがみられるため今後は、解法の途中過程やキーワードのみの記述から始めるなどスモールステップを重ね、失敗を恐れずに思考を表現する体験を積み重ねることが必要である。

④	さいたま市学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	
⇓	
結果から考えられる児童生徒の実態	

③	中間評価	
学力向上策の実施状況	評価（※） B	生徒の姿容と意欲の向上：授業に対する生徒の学習意欲はあり、課題に向き合う粘り強さは徐々に身についてきている様子が見受けられる。特に、自分たちに身近な事象や切実な問題に対する学習においては、高い学習意欲をもって取り組むことができている。教員の試行錯誤と工夫：思考力・判断力・表現力等の育成に重点を置いた学習活動を単元の中に位置づけるよう、試行錯誤を重ねている段階である。教師が生徒に学習の必然性をつくったり、学習意欲を高める工夫をそれぞれに創意・工夫することで学力向上を図っている。今後の課題：全ての学習事項において「生徒の身近な事象」に関連付けることは容易ではない。そのため、教師が関連性を伝えたり、生徒自らが概念化しながら学べるような授業づくりが、今後における重点事項として残されているため、現段階では「おおむね達成」という評価になっている。
⇓		
学力向上策の見直し	変更なし	

※評価　A 8割以上（達成） B 6割以上（おおむね達成） C 6割未満（あと一歩）